

高知市桂浜水族館に寄贈されたアカメとそれらの産地からの追加情報 (スズキ目：アカメ科)

町田吉彦*・丸林友文**

Notes on akame *Lates japonicus* donated to Katsurahama Aquarium
in Kochi City with additional information from their localities
(Perciformes : Latidae)

MACHIDA Yoshihiko* and MARUBAYASHI Tomofumi**

高知県下におけるアカメの産地に関しては公表された資料がきわめて乏しい。岡村 (2002) は本種の県内における産地として5地点を地図上で示したが、記述から判断して県西部から中部のそれらはおそらく四万十川河口域、仁淀川河口域および浦戸湾であり、土佐湾沿岸東部の地点は地図から判断して安芸川と奈半利川の河口ないし岸近くと考えられる。近年、長野ほか (2015) はこれまでに高知県内で実施されたアカメの調査結果をまとめ、それらの調査で得られた最大個体は高知市の浦戸湾流入河川の一つである長浜川で得られた標準体長284mmの個体であることを示した。一方、成魚に関するアカメの記録はもっぱら新聞報道に基づいてきたのが現状であり、確実な記録としては長野 (2015a) による東洋町の定置網での捕獲例と長野 (2015b) による安芸市沖のシラスパッチ網での捕獲例が挙げられるに過ぎなかったが、ようやく長野 (2016) により釣り人と漁業者により捕獲されたアカメの記録がまとめられるに至った。アカメは高知県絶滅危惧 IA 類であり (岡村, 2002), また、環境省指定の絶滅危惧 IB 類である (瀬能, 2015)。絶滅危惧種の指定に際して定量的データがない場合、生息地の面積とそれらが分断されているかどうかが重視される。そこで著者らは高知市近郊におけるアカメの情報を

充実させることを目的とし、高知県内では四万十川学遊館あきついおと並んでアカメの飼育・展示施設として知られている高知市浦戸の桂浜水族館に近年寄贈・搬入されたアカメの捕獲状況と、それらの地点で得られた他の個体ならびに生息地の情報を提供する。

表1に著者の一人、丸林が桂浜水族館への受け入れに直接関与したアカメを示す。これら以前から桂浜水族館で飼育・展示されていた個体のほとんどは飼育担当であった堀内誠氏 (2002年1月13日逝去) が生前に浦戸湾での自身の釣りにより得た個体であり、全長4-40cm程度であったが、捕獲の年月日とサイズの記録は残っていない。ただしそれ以降、丸林が受け入れに直接関与していない個体もあり、また、表1で示された産地が浦戸湾から浦ノ内湾までであることから、釣りで捕獲され「大物」として高知新聞で報道された浦戸湾、仁淀川河口域、浦ノ内湾産のアカメを表2に示す。ただし、版により掲載内容が異なるので、捕獲の日付は記事に従い、新聞の発刊日は省略した。

表1と表2に示された39個体のうち11個体が高知市春野町の新川川で、また、8個体が高知市浦戸湾でそれぞれ特定の個人により捕獲されたものである。これらの方々が桂浜水族館での飼育・展

*〒780-8063 高知市朝倉丙1767-5
1767-5 Hei, Asakura, Kochi 780-8063, Japan

**桂浜水族館

〒781-0262 高知市浦戸778
Katsurahama Aquarium, 778 Urado, Kochi 780-0262, Japan

表1. 丸林が桂浜水族館への受け入れに直接関与したアカメ

年	月	日	全長 (cm)	個体数	捕獲場所	捕獲手段
2009	9	10	127	1	浦戸湾弘化台	釣り
2011	8	7	120	1	高知市鏡川(浦戸湾)	釣り
2012	5	7	38-54	6	高知市春野町新川川	釣り●
		8	38-53	5	同上	同上●
	5	22	59	1*	浦戸湾	釣り▲
	5	26	61	1	同上	同上▲
	5	28	40-52	2	同上	同上▲
	5	30	51	2	同上	同上▲
	5	31	58-60	2	同上	同上▲
	10	14	20	1	浦ノ内湾	籠○
2013	6	26	27	1	浦ノ内湾	籠
		11	27	121	1	高知市春野町甲殿沖
2014	7	25	78	1	浦戸湾	釣り
		11	12	77	1	浦戸湾
	11	19	114	1	高知市種崎	釣り
	11	25	8	1**	浦戸湾	詳細不明
2015	1	20	28	1	浦ノ内湾	籠○
		3	2	123	1	高知市春野町甲殿沖

*標識装着個体, **一時飼育後に寄贈, ●▲○はそれぞれ同一人物.

示への協力を目的としてアカメを釣ったかどうかは分からないが、新川川の場合は群れを形成していたアカメを釣った可能性がある。また、19個体が浦戸湾とその流入河川で釣りにより捕獲された個体であり、そのうちの14個体が桂浜水族館に搬入されている。このことは桂浜水族館が浦戸湾湾口の西に隣接していることが挙げられるだろう。釣りで捕獲された全長1mを超える大型の個体となると、釣り人は高知新聞社へ連絡する価値があると判断している可能性が高い。表1と表2では、同一の釣り人が全長1mを超えるアカメを2個体以上捕獲した例はなく、今回の例では特定の人が集中的に「大物」を捕獲しているとは言えないようである。さらに、浦戸湾流入河川での大型個体の捕獲例も注目される(表2)。捕獲例ではないが、高知新聞の報道によれば、2014年6月10日に浦戸湾流入河川の鏡川の二次支流となる高知市神田の吉野川において、全長約60cmのアカメが元高知県水産試験場職員により目撃され、個体の写真が撮影された。吉野川は住宅密集地を流れる三面コンクリート張りの水路で水深は浅く、このアカメの背鰭が水面から出ているような写真も

表2. 1998年以降に浦ノ内湾から浦戸湾で釣獲され、高知新聞で報道されたアカメ

年	月	日	全長 (cm)	捕獲場所	備考
1998	7	26	101	浦ノ内湾	
1998	12	7	90	仁淀川河口	
2003	6	5	100	浦戸湾	
2005	10	6	115	浦戸湾吸江	
2006	8	25	105	鏡川(浦戸湾)	桂浜水族館へ搬入
2007	10	30	116	浦戸湾	桂浜水族館へ搬入
2007	12	20*	—	国分川(浦戸湾)*	アーカイバルタグ付き個体
2009	11	7	119	浦戸湾流入河川	
2010	9	29	110	鏡川(浦戸湾)	
2015	8	5	134	浦戸湾	

*長野(私信)による。タグ装着時の全長は115cm(高知新聞の報道)。

あり、感潮域と純淡水域の接点付近であることを町田が後に確認した。瀬能(2015)は、アカメはアカメ属中唯一淡水域に生息あるいは侵入しない種であるとしている。しかしながら蒲原(1937, 1958)は、浦戸湾のアカメ(*Psammoperca waigiensis*を学名として適用)の成魚は川を遡り淡水に入ることもできるとしており、アカメは従来から浦戸湾流入河川の環境を広く利用していると考えられる。なお、浦戸湾と浦戸湾流入河川での捕獲に関する詳細な資料が長野(2016)により示されている。

表1と表2の浦戸湾での捕獲は詳細不明の1例を除きすべて釣りによるものであるが、アカメはカニ類を目的とした浦戸湾の漁業者の刺し網(底刺し網)で捕獲されている。浦戸湾には多くのカニ類が生息しており、市販されている種も多い(町田ほか, 2009)。町田の聞き取りでは、浦戸湾の漁業者はアカメがカニ類、特に放流したノコギリガザミ属のカニを好んで捕食していると考えている。ノコギリガザミ属ではないが、町田は浦戸湾のアカメが捕食したミナミベニツケガニの成体を胃内容物として確認したことがある。さらに町田は、2003年7月26日に浦戸湾の衣ヶ島周辺に設置されたカニ用の刺し網で捕獲された全長約80cmのアカメを標本として提供してもらったが、この個体の他にも刺し網で混獲された個体を受け取っている。湾内の刺し網で捕獲されているアカメは全長60-90cmが多いようであるが、最近の聞き取り調査によれば、漁業者はアカメが増え

たと認識しており、刺し網を傷める厄介者として漁業者を悩ませている。一方で、四万十川でアカメが水面付近のボラを追いかけていたことを山崎（1993）が記録している。高知県の釣り人の間ではアカメがボラを捕食していると考えられているが、浦戸湾のアカメの胃内容物としてボラが観察されたという報告例はないと考えられる。ただし、町田は長野博光氏の厚意により、2009年6月27日に種子島で釣獲された全長95cmのアカメを解剖したところ、全長25cmと20cmのボラを胃内容物として確認しており、また、県内では生きたボラを餌にしてアカメを釣ることがあるとの聞き取り結果から、アカメが浦戸湾でボラを捕食していることは十分に考えられる。

浦戸湾外の記録では、湾口の東に隣接する高知市種崎海水浴場で釣獲された大型の個体が桂浜水族館に搬入されている（表1）。これまでアカメの捕獲場所として種崎は報告されていなかったが、2015年7月25日に、町田が種崎海水浴場で釣られた全長113cmと114cmのアカメを現場で確認した。さらに同所での聞き取り調査の結果、種崎では以前からアカメが釣られており、種崎海水浴場をホームグラウンドとしている釣り人は決して珍しい魚ではないと認識している。なお、同所ではその後、2015年10月17日に全長118cmの個体が釣獲されている（長野、2016）。

長野ほか（2015）は新川川とその支流のおもにセキシウモの群落を中心とする環境から標準体長8.5-95.2mmの多数のアカメを報告した。本報告の新川川産のアカメは長野ほか（2015）が記録したサイズよりはるかに大きいことが注目され、アカメが長期間にわたり新川川および甲殿川で生活していることが推察される。

新川川は最下流部で甲殿川と名称を変える。この河口の沖ではシラスパッチ網漁が盛んに行われており、全長1mを超えるアカメが2個体桂浜水族館に搬入されている（表1）。高知県下のシラスパッチ網漁でアカメが混獲されたことが長野（2015b）により初めて報告された。それによると、アカメは2007年4月27日に安芸市赤野沖で捕獲され、全長は1mであった（長野、2015b）。このように、本報告は県下のシラスパッチ網漁で得られたアカメの第2番目の記録となる。著者の一人、町田は2015年1月にこの提供者から同じくシラスパッチ網に入ったサツキマススの標本を受け

取った（町田、未発表）。本報告のアカメの場合は個体が大きかったため寄贈されたとも考えられるが、混獲物について関心が高い漁業者は少ないと考えられ、本報告の提供者以外の網にも入っている可能性がある。瀬能（2015）は、アカメの成魚は夜行性で、昼間は汽水域の岩礁や大きな人工構造物の陰に潜み、夜間活発に泳ぎ回って魚類を捕食するとしている。シラスパッチ網漁は陽が高い時間帯にのみ操業されることから、アカメが日中、海岸近くでどのような行動をしているのかをより追求する必要がある。

岡村（2002）は、アカメはその全国的分布からみても中心地であった浦戸湾と仁淀川において、1950年以前と以後を比較すると数十分の1から1/100の激減と判断され、その最大の要因は水質の汚染とアマモ場（コアマモ場の誤り：町田注）の埋め立てなどによる消失であるとした。しかしながら、1950年までの高知県下のアカメに関しての報告は蒲原（1937）と蒲原（1950）があるのみで、これらの中に仁淀川は登場していない。蒲原（1937）は浦戸湾で記録された魚類を極稀、稀、多、極多の4段階に分け、アカメは「多」であり、スズキ、ヘダイ、クロダイと同じレベルであるとした。また蒲原（1950）は、高知県内でのアカメの呼称をアカメ（高知）、ミノウオ（幡多郡下田、中村）としており、高知県の西南部のアカメにも触れているが仁淀川には言及していない。なお、現在の地名は四万十市下田、同中村であるが、当時は幡多郡下田町、同中村町である。蒲原（1958）は再度浦戸湾の魚類をまとめ、アカメを湾内重要種と位置づけた。この湾内重要種には29種が含まれており、「湾内で比較的多くとれる海魚で、食用として重要なものを挙げる。漁獲高の順位等は解らない」魚である（蒲原、1958）。このように、食用とされていた当時においてもアカメの漁獲量は不明なのである。故岡村博士は1933年に高知県でお生まれになったが、1950年はまだ高知大学入学前であり、それまでに独自にアカメに関する資料を集めていたとは考えられず、個体数が数十分の1から1/100へと減少したという記述を裏付ける客観的事実は皆無と思われる。また当時、四万十川河口域のアカメは現在ほど有名ではなかったと考えられるが、感潮域の面積から判断すれば、仁淀川のアカメの個体数が四万十川のそれを上回り、しかも浦戸湾に匹敵するほどだっ

たとは考えられない。本報告における仁淀川河口での捕獲例は1例のみであるが、長野(2016)は1987年から2015年の間に15個体が釣獲されたことを示している。仁淀川河口域はスズキ類やアカメを狙う釣り人が集まる場所のひとつであり、今後の聞き取り調査が必要であるが、面積的には浦戸湾とは比較にならない。

浦ノ内湾で大物として高知新聞で報道されたのは1個体である(表2)。浦ノ内湾内でアカメが釣獲されたことはインターネットでも散見されるが、浦戸湾と比較すると個体数に関する情報は圧倒的に少ない。長野(2016)は浦ノ内湾の土佐市側で1998年7月に全長101cmの個体が釣獲されたことを報告している。本報告の浦ノ内湾のアカメに関して注目すべきは、籠で捕獲された複数の個体が桂浜水族館に搬入された事実である。アカメが籠により捕獲されたという例はおそらく本報告が初めてと考えられる。丸林が浦ノ内湾の漁師から得た情報では、アカメはカニ専用の直方体の籠ではなく、カニも魚も入る円筒形の籠で混獲されたとのことである。浦ノ内湾沿いの店で土産として販売されているカニはイシガニが多いが、甲幅3-4cm以下のタイワンガザミの若い個体は湾奥部の浅所でも観察されるし、春から夏にかけては流入河川の河口付近でノコギリガザミ属の若い個体のごく頻繁に観察される(町田, 未発表)。したがって、アカメが籠でカニ類と混獲されることは十分にあり得る。

以上のように桂浜水族館に搬入されたアカメを検討した結果、アカメは土佐市ならびに須崎市の浦ノ内湾から高知市の海水浴場として知られている種崎までの広い水域を利用していると考えられ、籠での捕獲例から底生性の動物も捕食すること、シラスパッチ網と外海に面した種崎でのアカメの捕獲例から、内湾および河口がアカメにとってそれぞれした独立した生息場所ではないことが強く示唆される。

謝 辞

桂浜水族館に勤務されアカメ飼育の先駆者だった故堀内 誠氏、同水族館にアカメを寄贈していただいた多くの方々、貴重な情報を提供していただいた安芸市の長野博光氏、文献参照でお世話になった高知大学理学部の遠藤広光教授に厚く御礼

申し上げる。

引用文献

- 蒲原稔治. 1937. 浦戸湾内に於ける魚類の移動状態. 植物及動物, 2: 359-370.
- 蒲原稔治. 1950. 土佐及び紀州の魚類. 高知県文教協会, 高知市. iii + 288 + v + xlviii + xxvi pp.
- 蒲原稔治. 1958. 浦戸湾内の魚類. 高知大学学術研究報告, 7: 1-11.
- 町田吉彦・遠藤広光・山本藍子・渡邊博光. 2009. 浦戸湾の刺し網で得られたカニ類. (高知市・高知大学, 編: 高知市総合調査第1編地域の自然. 高知市総合調査受託研究成果報告書), pp. 535-540. 高知市・高知大学, 高知市.
- 長野博光. 2015a. 高知県安芸郡東洋町の定置網で得られたアカメの記録(スズキ目: アカメ科). 四国自然史科学研究, (8): 17-18.
- 長野博光. 2015b. 安芸市赤野沖のシラスパッチ網で得られたアカメの成魚(スズキ目: アカメ科). 四国自然史科学研究, (8): 30-31.
- 長野博光. 2016. 高知県における釣り人と漁業者によるアカメの記録(スズキ目: アカメ科). 四国自然史科学研究, (9): 21-27.
- 長野博光・石川晃寛・永井宏樹. 2015. 感潮域のコアマモ以外の水草群落から採集されたアカメの稚魚と未成魚(スズキ目: アカメ科). 四国自然史科学研究, (8): 1-10.
- 岡村 収. 2002. アカメ. (高知県レッドデータブック [動物編] 編集委員会, 編: 高知県レッドデータブック [動物編] - 高知県の絶滅のおそれのある野生動物), pp. 176-177. 高知県文化環境部環境保全課, 高知市.
- 瀬能 宏. 2015. アカメ. (環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 編: レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 4 汽水・淡水魚類), pp. 216-217. 株式会社ぎょうせい, 東京.
- 山崎 武. 1993. 四万十川 川漁師ものがたり. 238 pp. 同時代社, 東京.

(原稿受理: 2015年12月29日)